

青山会文庫蔵「さころもの哥」についての考察

——狭衣物語歌集の紹介と意義——

須藤 圭

一 物語の和歌を抜き書きすること

「源氏見ざる歌詠みは遺恨事也」^①——藤原俊成が判じて以降、源氏物語が歌人にとって必読の書となったことは言うまでもない。その一方で、俊成の子定家が、次のような言葉を残している。——「源氏并狭衣於歌者
抜群……」^②

而して、狭衣物語の和歌が広く受容されていたであろうことは、容易に推測ができ、中世以降の和歌における影響もその大きさが既に指摘されている。では、その狭衣物語の和歌は、一体どのような形をもって享受されてきたのか。

源氏物語においては、『林下集』^③に「源氏集を皇太后宮大夫俊成卿にかりて、かへしおくとて、かきはべりし」とあることや、『明月記』^④建永二年（一二〇七）五月二日の条に「亥時許、家綱奉行賜源氏集一帖、其歌可書進由有仰事、終夜書之、曉鐘以後進上付家綱」、あるいは建永二年（一二〇七）五月四日の条に「申時許、又給源氏集下帖、書進」と見えるように、源氏物語の和歌を抜き書きした「源氏集」なるもの、すなわち、源氏物語歌集が存在し、広く愛好されていたことをうかがい知ることができる。物語の和歌の抜き書きといえば、源氏物語に留まらない。伊勢物語やうつほ物語の和歌を抜き書きした歌集が知られており、『物語二百年歌合』や『風葉和歌集』も、物語の和歌に対する関心から生まれたもの

のとなすことができる。

このように考えると、先に提起した、狭衣物語の和歌を如何に享受してきたか、という問いに対して、歌集という方法をもって享受していた、という解答が強く意識されてよい。事実、狭衣物語が多く読まれてきたことは述べるまでもないが、歌集としての受容があったことも散見できる。『明月記』建永二年（一二〇七）五月十六日の条に「狭衣歌可書進由有仰事未時、即馳筆、秉燭持参付清範」、建永二年（一二〇七）五月十七日の条に「又給狭衣御点、書進之」とあり、また、『私所持和歌草子目録』^⑤に「狭衣和歌集」の名が見える。このことは、源氏物語ほどではないにせよ、同じ長編物語であり、なおかつ、後代に大きな影響を与えた狭衣物語にあつて、その和歌を抜き書きした歌集の存在を指し示しているだけではなく、それが広く受け入れられていたことを想定するに十分であろう。近年、中城さと子氏「山岸文庫蔵『狭衣哥よせ』について」^⑥において、狭衣物語の和歌とその周辺の本文をそのまま、あるいは梗概化して抜き出した「狭衣哥よせ」が紹介され、詳細な分析がなされている。また、齋木泰孝氏「狭衣物語の「ある本に」の歌について——「飛鳥井雅章筆本」を中心に——」^⑦では、狭衣物語の異文が生み出された原因を考察する中で、「源氏物語に物語和歌を抄出した『源氏物語歌集』があるように、『狭衣哥よせ』以外にも各種の『狭衣物語歌集』があつたと思われる。切り出された和歌に、物語本文を要約・敷衍した詞書が付けられ、

やがてその詞書がいつのまにか狭衣物語本文に流入してしまう、そうした過程を想像してみるのである。」と述べ、狭衣物語の和歌を抜き書きした、いわゆる、狭衣物語歌集の重要性を提起し、狭衣物語から狭衣物語歌集、そして狭衣物語へ、という展開を推測するのである。

果たして、狭衣物語の和歌は、どのように、理解され、享受されていたのか。狭衣物語歌集という存在は、その和歌が単に重要視されていたことを示すだけではなく、狭衣物語の和歌がどのように読まれてきたか、という問題を解決しよう。さらに、物語歌集自体を丹念に読み解くことによって、それが生まれるに至った必然性や歴史を見出すことができ、同時に、狭衣物語の読まれ方という切り口をも示すことになるのではないか。本稿では、狭衣物語享受史の上で重要な存在を担っていたと考えられる狭衣物語歌集の中、青山会文庫蔵「さころもの哥」を取り上げる。また、該本の影印・翻刻は別稿を予定している。あわせて参照いただきたい。

二 「さころもの哥」三つの伝本

本稿で取り上げる青山会文庫蔵「さころもの哥」(函架番号・二〇三。以下、青山本)の概略は『青山会文庫所蔵和漢書分類目録』^⑨に簡単に紹介されているが、改めて記しておく。

【装訂】 写本一帖、枳形本、列帖装

【寸法】 竪一六・七×横一七・九糎

【表紙】 砥粉地に墨流し模様、見返しは鳥の子紙(本文料紙と共紙)

【外題】 さころもの哥(表紙中央上に書き外題)

【内題】 さころもの哥

【料紙】 鳥の子紙(文様有)

【本文】 半葉十二行書(和歌一首二行、第三句と第四句で区切る。)

【製本】 折帖二括。(第一括)六紙を重ねて二つ折にして十二丁とする。初め一丁半を白紙とし、墨付十丁半。墨付七丁半四行目と五行目の間に貼紙一枚を有する。(第二括)六紙を重ねて二つ折にして十二丁とする。墨付七丁半、次の半丁は白紙、その後に墨付一丁半とし、最後に白紙二丁半。ただし、墨付七丁半および墨付一丁半の最後のみ、末尾を散らし書き風にして和歌一首三行とする。計、墨付十九丁半、二十四丁。

【備考】 尊鎮流の筆である。識語、旧蔵印なし。表紙に現在の函架番号の他、旧函架番号が見える。

尊鎮流の筆であつて、例えば、尊鎮自筆とされる書蹟と比較しても遜色ないが、自筆とは認められない。すなわち、青山本を収める青山会文庫は、近世、大坂城代であつた青山宗俊やその子忠雄などによつて堂上人の教養として蒐集された典籍が多く所蔵されているが、青山本と同じ尊鎮流の右筆による写本も多いという。また、その中でも、例えば、「和泉式部詠草」(函架番号・一一九)は、同じ右筆による本文であつて、表紙も該本と同じ砥粉地に墨流し模様のものを用いている。しかし、本文料紙は楮紙で袋綴である。このことから、該本の親本が美麗な一帖であつて、それによつて、青山本の本文料紙に文様のある鳥の子紙を使用したと推測することも可能なように思われる。

墨付七丁半四行目と五行目の間、九丁ウラ87番歌の箇所にある貼紙には、「此哥類句にも狭衣にも不見」と書かれている。これは、書写者、あるいは青山本を享受した人物によるものと考えられ、貼紙に見られる「類句」は、寛文六年(一六六六)に刊行された山本春正著『古今類句』であ

ろうし、「狭衣」は手近にあったと思われる狭衣物語の刊本であろう。『古今類句』^⑧は、二十一代集、六家集、伊勢物語、大和物語、源氏物語、狭衣物語の他、新葉和歌集や拾遺愚草員外の和歌を収め、第四句をいろは順に検索できるよう並べたものである。狭衣物語は非流布本系統の本文に依っているが、87番歌は見当たらない。一方、狭衣物語の刊本（元和九年（一六二三）古活字本や承応三年（一六五四）版本などがある）、流布本系統にも、87番歌は見当たらない。

ところで、青山本には、それに極めて似る伝本を見出すことができる。今治市河野美術館（旧、河野信一記念文化館）蔵「さころもの哥」（函架番号・一二五―二四三。以下、河野本）、青谿書屋旧蔵（現、今治市河野美術館蔵）「さころもの哥」（函架番号・一二五―二四三。以下、青谿書屋本）の二本である。両者は同じ函架番号であるが、後述するように、両本が一つの箱の中に収められているためである。前者は完本一帖のもの、後者は数丁の零本であつて青谿書屋の印記を有しているため、前述のような名称を本稿では用いる。まずは前者の書誌^⑨を示せば、次の通りである。

【装訂】 写本一帖、枳形本、列帖装

【寸法】 縦一六・〇糎×横一五・四糎

【表紙】 紺地に牡丹唐草模様の古代裂、見返しは金銀箔貼

【外題】 （ナシ）

【内題】 さころもの哥

【料紙】 鳥の子紙

【製本】 折帖二括。〔第一括〕七紙を重ねて二つ折にして十四丁とする。初め一丁を表紙と見返しの間に収め、白紙半丁の後、墨付十二丁半。白紙に貼紙二枚を有する。現在は糊が効かなくなっている。〔第二括〕五紙を重ねて二つ折にして十丁とする。

青山会文庫蔵「さころもの哥」についての考察

る。墨付五丁半、次の半丁は白紙、その後に墨付一丁半とし、白紙半丁、最後の二丁は裏表紙と見返しの間に収める。ただし、墨付五丁半および墨付一丁半の最後のみ、末尾を散らし書き風にして和歌一首三行とする。計、墨付十九丁半、二十一丁。

【本文】 半葉十二行書（和歌一首二行、第三句と第四句で区切る。）

【備考】 尊鎮流の筆である。擦り消し訂正が数箇所に見られる。識語、旧蔵印はないが、花押がある。箱入。箱には「青蓮院殿尊鎮法親王御筆／更衣哥」とあり、河野本と青谿書屋本、包紙一紙、極札一枚に加え、散華の華二枚（内、一枚は絵人）と用途不明の札一枚を収める。

河野本は外題を欠くが、尊鎮流の筆であることや字母字形、傍書を含めてその本文までも青山本とほとんど同じである。わずかに本文に異同が見られるが、かなり近い一本であると考えられる。

ここで注目できるのは、包紙、極札と一丁オモテの貼紙である。これを順に示せば、

長円極札

（以上、包紙）

さころもの哥

青蓮院尊鎮法親王
書付三井寺法師長円

（印）

（以上、極札）

青蓮院尊鎮御筆書付三井寺

仏地院僧正長円御筆万里小路庶流

尊鎮御判有

（以上、一丁オモテ右貼紙）

此一冊者尊鎮御真筆無疑者也

寛永第八三月吉祥日

僧正長円

(以上、一丁オモテ左貼紙)

の如くである。左貼紙から、寛永八年(二六三二)に長円なる人物が尊鎮自筆であることを認めていることが分かる。さらに、右貼紙には、三井寺にて長円が書き付けたとあり、長円の詳細についても書かれている。長円は万里小路庶流の人物だという。極札は、これらをあわせて、尊鎮自筆であることに加えて、三井寺にて長円が書き付けたことを証している。包紙は、極札が長円に関わるものであることを指しているよう。

伝筆者とされる尊鎮は、永正元年(一五〇四)に後柏原天皇の第三皇子として生まれ、和歌は常光院流を伝え、能筆家として知られた人物である。和歌事蹟も多く、大永四年(一五二四)の法華経和歌の勧進などが知られ、青蓮院庁務であった鳥居小路経厚に学び、経厚講尊鎮記『愚問賢注聞書』や古今伝授を受けたらしいことが伝わる。¹⁵ 天文十九年(一五五〇)没。

一方、長円に関しては不明な部分が多いが、『昭和現存天台書籍総合目録』¹⁶にその名が見え、三井寺(園城寺)の僧正である。万里小路家の庶流であるかは判然としないが、この人物と見て間違いはなさそうである。寛永十一年(一六三四)の『行次胎護金目録』などの著作があり、明暦三年(一六五七)には『邪氣調伏護摩』を書写したらしい。生没年不明。

極札には「牛庵」の印がある。裏印なし。左貼紙が成った寛永八年(二六三二)以後とするならば、二代目畠山牛庵となり、古筆家の印譜を集成した慶応三年(一八六七)刊『和漢書画古筆鑑定家印譜』¹⁷の印とも合致する。

貼紙や極札が尊鎮自筆とする

理由は、単に尊鎮流の筆であるからだけではない。加えて、奥書は見られないが、末尾に尊鎮のものと思われる花押が単独と書かれていることが一因となつていよう。花押がこのように書かれているのは珍しく思われるが、宮内庁書陵部蔵「源氏物語」(函架番号・五五三一〇。俗に「三条西実隆加証奥書本」と称される。)と同様である。ただ、この花押は、辞典等¹⁸に載る尊鎮の花押には近いが、必ずしも同一とはいえない。もつとも、河野本には、擦り消し訂正や誤写と思われる箇所がいくつか見られるため、好学の親王として知られる尊鎮の自筆によるものだと考え難い。ところで、河野本の表表紙、および裏表紙は、厚紙(本文とは異なる紙)に古代裂を被せる形で作られているが、裏表紙の厚紙に尊鎮のものとは異なる別の花押が書かれている。¹⁹【図】参照。花押が誰のものであるかは、河野本の成立を考える上で重要な要素であると考えられるが、辞典等を見る限り特定し得ない。

これら二本に酷似するもう一本、青谿書屋本の書誌を次に挙げる。

【装訂】写本一帖、枡形本、列帖装

【寸法】縦一七・二×横一八・〇 糹

【表紙】斐楮交漉紙、見返しは鳥の子紙

四

【図】河野本裏表紙厚紙の花押



【外題】 さころもの哥（表紙中央上に書き外題）

【内題】（落丁のため不明）

【料紙】 斐楮交漉紙

【製本】 元は列帖装。現在は綴じが外れており、表紙一丁、本文一丁、印記のみを有する一丁、裏表紙一丁の計四丁が残る。本文一丁と印記を有する一丁は同じ一紙からなっており（この間の数丁は脱落）、これに裏表紙一丁が貼り付く形になっている。表紙は単独で残る。

【本文】 半葉十二行書（和歌一首二行、第三句と第四句で区切る。）

【備考】 尊鎮流の筆である。印記「青谿書屋」。箱入。先述の通りである。

青谿書屋本は127番歌第四句から139番歌第三句までの本文のみを残す、零本である。綴じが外れているため、それを原因として大部分が散逸したのであろう。

これら、青山本、河野本、青谿書屋本を厳密に比較すれば、その書き方は、青山本と青谿書屋本が近く、河野本は親本に忠実にあろうとしたためか、一行の後半を無理に行内に収めようとしたものがわずかに見受けられる。しかし、それでも酷似していることには変わりなく、これらは同一の祖本から成ったと見てよい。尊鎮流の筆であることから、成立の上限を十六世紀頃、河野本の貼紙から下限を寛永八年（一六三一）と定めることができる。筆者に関しては、どれも尊鎮自筆である確証は全くないが、尊鎮流の筆になる写本が三本も現存していることを思えば、尊鎮との何らかの関わりを想定してもよさそうである。尊鎮は、狭衣物語の注釈書である『狭衣系図』を著した三条西実隆とも接触しており、里村紹巴による『狭衣下紐』の成立を間近に控えた、狭衣物語の画期に生

きた人物でもある。

三 本文の様相

さて、それでは、青山本はどのような特徴をもつ狭衣物語歌集といえるのであろうか。青山本には、狭衣物語の和歌二百十四首の後、白紙半丁を挟んで、定家詠十四首・慈円詠一首が書かれている。まずは、狭衣物語歌の検討から始めたい。

青山本には、和歌本文だけではなく、詠者名、さらに詠歌注記とでも表しえる若干の詠作状況が付されていることがその特徴である。単に和歌を抜き書きするだけではなく、物語を享受しつつ、制作されたことが推測されるのである。詠歌注記に関して、「御返」といった程度であれば、承応三年（一六五四）版本を抜き書きしたと思われる大塚甲山文庫本にも散見できるが、例えば、10番歌にある「さかのいん御しらねの時」のような詠作状況を推測しえる内容は、他の狭衣物語歌集には見られない記述である。唯一、大塚甲山文庫本の134番歌に「入道宮の心の中の哥也」とあるものが類似する程度だが、これは承応三年（一六五四）版本と同じである。よって、これだけを取り上げてみても、狭衣物語歌集の中でも注目すべき伝本であることは明らかである。

では、まずは依拠本文を確定するため、狭衣物語歌について、『校本狭衣物語』²⁰などを用いて比較してみると、所収歌の一致する伝本は見当たらない。巻ごとに分ければ、どの伝本も所収する8番歌を欠くなど、巻一は一致する伝本がなく、巻二は九条家旧蔵本（67番歌の箇所を欠くが、仮に同類とされる平瀬本で補った場合）、巻三は深川本・伝為家筆本・九条家旧蔵本¹⁴²（番歌の箇所を欠くが、仮に同類とされる京大五冊本で補った場合）・飛鳥井雅章筆本・宝玲本、巻四は多くの伝本が一致する。所収歌のみを

鑑みれば、九条家旧蔵本が近似するが、これといった伝本は決めがたい。次に、和歌本文の異同を検討してみると、青山本にしか見出すことのできない和歌本文をいくらか見出すことができる。(青山本のみに見られる箇所を網掛けにして示す。参考として任意に選んだ内閣文庫本・九条家旧蔵本(巻三の142番歌を同類とされる京大五冊本で補う。巻四の201番歌は同類とされる伝為秀筆本も欠く)・承応三年(一六五四)版本の和歌を併記するが、私に仮名漢字・清濁の別を改めた箇所がある。)

- 15 よしさらはむかしのあとをたつねみん我のみまよふこひのみちかは
よしさらはむかしのあとをたつねみよ我のみまよふこひのみちかは
よしさらはむかしのあとをたつねみよ我のみまよふこひのみちかは
よしさらはむかしのあとをたつねみよ我のみまよふこひのみちかは
20 とまれともえこそいはれね飛鳥井に宿りはつへき宿しみえねは
とまれともえこそいはれね飛鳥井に宿りはつへきかけしなけれは
とまれともえこそいはれね飛鳥井に宿りはつへきかけしなけれは
とまれともえこそいはれね飛鳥井に宿りはつへきかけしなけれは
35 かちもたえいのちもたゆとしらせはやなみたのうみにしつむ舟人
かちをたえいのちもたゆとしらせはやなみたのうみにしつむ舟人
かちをたえいのちもたゆとしらせはやなみたのうみにしつむ舟人
かちをたえいのちもたゆとしらせはやなみたのうみにしつむ舟人
かちをたえいのちもたゆとしらせはやなみたのうみにしつむ舟人
62 もえわたる我身そふしの山にた、雪にもきえすけふりたちつ、
もえわたる我身そふしの山よた、雪にもきえすけふりたちつ、
もえわたる我身そふしの山よた、雪にもきえすけふりたちつ、
もえわたる我身そふしの山よた、雪にもきえすけふりたちつ、
もえわたる我身そふしの山よた、雪つもれともけふりたちつ、
64b ゆくすゑもちきりやはするくれ竹のうれはのゆきをないたのむらん

六

- (参考・64行末も頼みやはする竹の葉にかゝれる雪のいく世ともなし)
ゆくすゑもちきりやはするくれ竹のうれはのゆきのなにのむらん
(参考・64末の世も何頼むらむ竹の葉にかゝれる雪の消えも果てな)
65 そよさらにたのむにもあらぬこさゝさへすゑ葉の雪のきえもはてなん
そよさらにたのむにもあらぬこさゝさへすゑ葉の雪のきえもはてなん
そよさらにたのむにもあらぬこさゝさへすゑ葉の雪のきえもはてなん
そよさらにたのむにもあらぬこさゝさへすゑ葉の雪のきえもはてなん
70 神代よりしめいひそめしさかき葉をわれより外にたれかをるへき
神代よりしめひきゆひしさかき葉をわれより前にたれかをるへき
神代よりしめひきゆひしさかき葉をわれより外にたれかをるへき
神代よりしめひきゆひしさかき葉をわれより外にたれかをるへき
71 かみ山のしい柴かくれしのへはそゆふをもかへる賀ものみつかき
神垣やしひ柴かくれしのへはそゆふをもかへる賀ものみつかき
神山のしひ柴かくれしのへはそゆふをもかへる賀ものかはなみ
神山のしひ柴かくれしのへはそゆふをもかへる賀ものかはなみ
92 かしわきのはもりのかみになとてわれ雨もらさしとちきらさりけり
かしわきのはもりのかみになとてわれ雨もらさしとちきらさりけり
かしわきのはもりのかみになとてわれ雨もらさしとちきらさりけり
かしわきのはもりのかみになとてわれ雨もらさしとちきらさりけり
かしわきのはもりのかみになとてわれ雨もらさしとちきらさりけり
93 こひわひてなみたにぬるゝふるさとの草葉にまじるやまとなてしこ
こひわひてなみたにぬるゝふるさとの草葉にまじるやまとなてしこ
こひわひてなみたにぬるゝふるさとの草葉にまじるやまとなてしこ
こひわひてなみたにぬるゝふるさとの草葉にまじるやまとなてしこ
110 たのみこしいつらときはのもりやこれ人たのめなる名にこそ有けれ
たのめこしいつらときはのもりやこれ人たのめなる名にこそ有けれ
たのめこしいつらときはのもりやこれ人たのめなる名にこそ有けれ
たのめこしいつらときはのもりやこれ人たのめなる名にこそ有けれ

たのめこしいつらときはのもりやこれ人たのめなる名にこそ有けれ

115 おもひのみなかれやはせむありす川今も□あるし我としらすや

おのれのみなかれやはせむありす川岩もあるし我としらすや

おのれのみなかれやはせむありす川石もあるし我としらすや

おのれのみなかれやはせむありす川岩もあるし今はたえせし

119 かつらはや神もきくらんほと、きすおもはむかきりこゑなをしみそ

かつらは、神もきくらんほと、きすおもはむかきりこゑなをしみそ

かつらは、神もきくらんほと、きすおもはむかきりこゑなをしみそ

かつらは、神もきくらんほと、きすおもはむかきりこゑなをしみそ

122 あかさりし跡をかよふといそのかみふる野のみちをたつねてそみる

あかさりし跡をかよふといそのかみふる野のみちをたつねてそみる

あかさりし跡をかよふといそのかみふる野のみちをたつねてそみる

あかさりし跡をかよふといそのかみふる野のみちをたつねてそみる

128 なひくともなひくなく夢しのす、き秋かせふかぬ野へはみえぬに

なひくともなひくなく夢しのす、き秋かせふかぬ野へはみえぬに

なひくともなひくなく夢しのす、き秋かせふかぬ野へはみえぬに

なひくともなひくなく夢しのす、き秋かせふかぬ野へはみえぬに

134 のこりなくうきめかつきし里のあまをいまくりかへしなにかうらみん

のこりなくうきめかつきし里のあまをいまくりかへしなにかうらみん

のこりなくうきめかつきし里のあまをいまくりかへしなにかうらみん

のこりなくうきめかつきし里のあまをいまくりかへしなにかうらみん

142 なみたのみよとまぬかわになかれつ、わかる、道のゆきもやられす

なみたのみよとまぬかわになかれつ、わかる、道のゆきもやられす

なみたのみよとまぬかわになかれつ、わかる、道のゆきもやられす

なみたのみよとまぬかわになかれつ、わかる、道のゆきもやられす

151 さかき葉に猶おりかへよはなさくらまたそのかみの我身思はむ

さかき葉に猶おりかへよはなさくらまたそのかみの我身と思はむ

さかき葉に猶おりかへよはなさくらまたそのかみの我身と思はむ

さかき葉に猶おりかへよはなさくらまたそのかみの我身と思はむ

さかき葉に猶おりかへよはなさくらまたそのかみの我身と思はむ

153 みかきもり野へのかすみの隙ならて折てすきゆく花さくらかな

みかきもり野へのかすみの隙ならて折てすきゆく花さくらかな

みかきもり野へのかすみの隙ならて折てすきゆく花さくらかな

みかきもり野へのかすみの隙ならて折てすきゆく花さくらかな

154 はなさくら野へのかすみの隙ならて折てすきゆく花さくらかな

はなさくら野へのかすみの隙ならて折てすきゆく花さくらかな

はなさくら野へのかすみの隙ならて折てすきゆく花さくらかな

はなさくら野へのかすみの隙ならて折てすきゆく花さくらかな

158 のとかにもたのまさらなん庭たつみかけみゆへくもあらぬなかめを

のとかにもたのまさらなん庭たつみかけみゆへくもあらぬなかめを

のとかにもたのまさらなん庭たつみかけみゆへくもあらぬなかめを

のとかにもたのまさらなん庭たつみかけみゆへくもあらぬなかめを

169 たえぬへき心ちのみするうきぬなはますたのいけもかいなかりけり

たえぬへき心ちのみするうきぬなはますたのいけもかいなかりけり

たえぬへき心ちのみするうきぬなはますたのいけもかいなかりけり

たえぬへき心ちのみするうきぬなはますたのいけもかいなかりけり

170 なけきわひねぬ夜の空に似たるかなこ、ろつくしのあり明のつき

なけきわひねぬ夜の空に似たるかなこ、ろつくしのあり明のつき

なけきわひねぬ夜の空に似たるかなこ、ろつくしのあり明のつき

なけきわひねぬ夜の空に似たるかなこ、ろつくしのあり明のつき

177 うかりけるわか中山のちきりかなこえすはなに、あひみそめけむ

うかりけるわか中山のちきりかなこえすはなに、あひみそめけむ

うかりけるわか中山のちきりかなこえすはなに、あひみそめけむ

うかりけるわか中山のちきりかなこえずはなに、あひみそめけむ
 186 大かたに身をやなけましみるからになくさのはまも袖ぬらしけり

大かたは身をやなけましみるからになくさのはまも袖ぬらしけり
 大かたは身をやなけましみるからになくさのはまも袖ぬらしけり

201 あれとみる身はふなおかにこかれつ、おもふこ、ろのこはゆけるかな
 それとみる身はふなおかにこかれつ、おもふこ、ろのこえもゆかぬか

(ナシ)

215 きえはて、かはねはいに成ぬともこひのけふりはたちははなれし
 きえはて、かはねはいに成ぬともこひのけふりはたちもはなれし

しにはて、かはねはいと成ぬともこひのけふりはみをしはなれし
 きえはて、かはねはいに成ぬともこひのけふりはたちもはなれし

単に助詞や助動詞の異同も多いが、それでも、これほどまでに異文が生じていることはどのように捉えるべきなのであろうか。物語の中でも目立つ和歌は校訂されやすく、また、勅撰集などのよく知れた和歌からの影響も考えなければならぬ。しかし、所収される和歌の状況も鑑みるに、現在までに紹介された本文とは多少なりとも違いのある異文の存在を考えてもよいように思うのである。

次に、詠者名・詠歌注記の検討に入る。詠者名・詠歌注記からは、以下の二点が問題になるように思う。詠者名・詠歌注記から見える物語本文の様相と、詠歌注記が付された原因である。前者から、具体的に例を挙げながら考察する。

まず注目したいのは、次の和歌である。

151 さかき葉に猶おりかへよはなさくらまたそのかみの我身思はむ

女へつたうかへし

不審に思われるのは、詠者名である。151番歌は、『狭衣下紐』や承応三年（一六五四）版本では女一宮詠とされる和歌のはずである。該当の場面を、私に検討した範囲において巻四で青山本と和歌本文の異同がもっとも少ない飛鳥井雅章筆本から引用する。

弥生の一日頃に、斎院の御前の桜いみじう盛りなるを、（中略）御覧じ馴れし古里の八重桜、いかならんと申し召しやらる。一枝をだに今は見るまじきぞかした、花の上ばかり、口惜しき御心の内なり。

一枝づ、匂ひをこせよ八重桜こち吹風のたよりすすきす
 と思し召すも、侍遠なれば、女御殿に聞こえ給ふ。

時しらぬ榊の枝に折かへてよそにも花を思ひやるかな

やがていと青き榊の枝につけさせ給へり。思しやらる、もしるくて、殿の桜は、峰続きかくやとみえて、散るも盛りなるも様々めでたきを、女御殿は悩ましき御心の紛らはしにも眺めいたさせ給ふほどに、この変はらぬ色はめづらしう思されて、過ぎにしかたいと、恋しく思し出でられけり。

榊葉に猶折かへよ花桜またそのかみの我身と思はむ

なへてならぬ枝にぞさしかへて、奉らせ給ける。

内閣文庫本や九条家旧蔵本を見ても、本文に大きな変化は見られない。斎院となり住み慣れた堀川院に戻ることのできない今、源氏宮は見ることのできない堀川院の桜を思い出す。「匂ひをこせよ八重桜」とせめて匂いだけでも届いて欲しいと思ひ、その時、堀川院に退出していた女一宮に「花を思ひやるかな」と堀川院の桜の替わりとして折った榊の枝をつけた和歌を贈る。これに対して、女一宮は榊の枝を「なへてならぬ枝」

に付け替えて返歌をする場面である。源氏宮は堀川院から斎院へ、方や、女一宮は斎院から堀川院へ。ちょうど居所の入れ替わった二人がそれぞれに過去を思い出して詠むのであるが、青山本は女一宮詠の151番歌を「女へつたう」、つまり、女別当の詠歌とするのである。女別当は、源氏宮に仕える女房であって、斎院におり、堀川院にいるとは考えられない。すなわち、151番歌は、堀川院にいる女一宮の詠歌でなければならず、飛鳥井雅章筆本などからは、女別当の詠歌とは解釈できないのである。そうであるならば、やはり、ここに異文の様相を見出してもよいのではないだろうか。もちろん、女一宮の詠歌を女別当の詠歌にするような、大きな構成の変更までも行われたとは考えにくい。ここでは、そうした読みを許容するような本文が存在していたであろうことと、青山本の作者の姿勢を想定したい。

付言しておけば、この場面の後、源氏宮の詠歌を見た狭衣が、堀川院の桜をもって源氏宮を訪れる場面がある。仮に源氏宮が誰からも桜を受け取っていない状況で狭衣の来訪を迎えれば、より印象の強い場面が形成されるようにも思う。

140 いはすともわか心にもかゝらずやほたしはかりはおもはさりけり

同

140 番歌は源氏宮の詠歌とされる。しかし、青山本は「同」と狭衣詠としているのである。私に検討した範囲において巻三で青山本と和歌本文の異同がもっとも少ない深川本²³から、該当の場面を引用する。

昔、隔てなく思聞こえ給し名残もかはるへきならねは、まことにさやうにし給は、殿、上などの思し惑はん有様、限りあらん御命とも、いかゝとあらましことにてたに、いとゆゝしういみしかるへき

に我も涙落ちぬへけれど、答へ聞こえさせ給へうもなければた、

いはすとも我心にもかゝらずや絆はかりは思はさりけり

わさとなう言ひ消たせ給へるはけに髪剃も捨てぬへき様也。(中略)

行き返りたゝひたみちに惑ひつゝ、身は中空になりねとやさは

忍ふもちすりは猶かこち聞こへさせつへくこそとて、ほろくゝとこほし初め給へる涙は、かこちかましよういみしきに御送りの人々帰り参りぬれば、さりけなくて、眺め出たし給へり。

源氏宮は、出家を仄めかす狭衣に、かつて兄妹のように親しくあったことや父母の悲しみを思い、出家を引き留める和歌を詠む。対して、狭衣は141番歌「行き返りたゝひたみちに惑ひつゝ、身は中空になりねとやさは」と返歌し、贈答が形成されている。青山本では、その源氏宮の詠歌を狭衣の詠歌とすることによって、源氏宮が出家を引き止める和歌を詠むという行為を描かない。狭衣を常に拒絶し続けた源氏宮が、たとえ出家を告白されても心揺るがすことのない、そうした理解を許容する本文、あるいは解釈がなされていたと考えられよう。

この他、104番歌も、承応三年(一六五四)版本などから解釈される詠者とは異なつた詠者名が記されている。

104 おもふよりまたおもふへき人やあると心にこゝろとは、しりなん

同

巻三、飛鳥井姫君を引き取って育てている一品宮に対して、飛鳥井女君との間に生まれた娘であることを隠しながら姫君の袴着を勧めてその世話を申し出る狭衣に、一品宮の詠んだ和歌が104番歌である。あなたが思う以上に姫君のことを思う人などいるのだろうか、と狭衣に訴える和歌となっている。続く狭衣詠の105番歌「思ふより又はこゝろのあらはこ

そとひもとはすもしりてまとはめ」との贈答となっているのであるが、青山本では、これを「同」と示し狭衣の詠歌とし、贈答とはしていない。しかし、104番歌を狭衣詠とするような本文や読者の読みを考えるならば、姫君との関係を露呈する危険を有してしまいが、姫君を思う和歌を連作する狭衣の、姫君に対する愛情を強く示そうとする意識が見て取れるのではないだろうか。ここにも、青山本が示した詠者による和歌と読むことが出来る本文と解釈の余地が見出せるように思われるのである。

もちろん、誤読や誤写であることも十分に考えなければならない。例えば、次の和歌を見たい。

64b ゆくすゑもちきりやはするくれ竹のうれはのゆきをなにしたのむらん

けんしの宮かはりには、宮

177 うかりけるわか中山のちきりかなこえすはなに、あひみそめける

宮の姫君

卷二の64b番歌について、卷二において所収歌の一致する九条家旧蔵本を引用すると、

聞こえさせそこなひてんは口惜しくやとて、うち置き給へれば、いとそこなはぬやうはあらしかし、とのたまはすれど、さりとともやはとて、

行末も契やはするくれ竹のうは葉の雪のなにのむらん

とある。深川本や承応三年（一六五四）版本でも大きな異同はない。春宮から贈られた和歌に対して返歌をしない源氏宮に、堀川上が代詠を狭衣に頼み、それに応じた和歌と考えられる。青山本では、狭衣の代詠ではなく堀川上の代詠とする。青山本の依拠した本文がこれらに近いとすれば、返歌を求める堀川上に狭衣は「さりとともやは」と断って、結局は堀

川上が代詠するに至ったと解することもできようか。ただし、狭衣の代詠と捉えなければ、前後の文脈との接続が悪く、誤読と判断すべきであろう。しかしながら、仮に誤読であったとしても、ひとつの狭衣物語の読み方としては認められなければならない。また、177番歌の場合、それまでに狭衣詠が続いて「同」と連続し、これ以降、宰相中将妹君の詠歌が続いて同じく「同」と連続するため、誤写の可能性も考えられてよい。もっとも、その場合には、親本が書かれる段階の誤写ではなく、書写過程における誤写と捉える方が適切であろう。

ところで、167番歌も詠者名が異なる例として挙げられる。

167 うき物といまそしりぬるかきりあれは思ひながらもそむきける世を

中将は、上

青山本の「中将は、上」であれば、狭衣母堀川上の詠歌ということになる。しかし、ここは「宮の中将は、上」の詠歌として、「宮の」が単に省略されたと考えた方がよい。他に同様の例はないが、該当の場面は宰相中将妹君を巡る、狭衣と宰相中将母君とが交錯する場面であり、堀川上の介入する余地はない。また、167番歌は宰相中将妹君の詠歌であるが、母君に促されて型通りに詠んだ和歌であるから、宰相中将母君の代詠と捉えられたのであろう。承応三年（一六五四）版本も同じく宰相中将母君の詠歌としている。

詠者名のみに注目すれば、「誰とはなし」と記すものや詠者名を記さない和歌も見出すことができる。

宮中からの帰り、狭衣を見た女からの和歌である3番歌には「誰とはなし」と書かれる。この女は後に「蓬が門の女」と称されて幾度か登場するが、この場面では、行きずりの恋には流されずに源氏宮への思いを

強くもつ狭衣の姿を強調するために登場していると見なすことができる。そのため、特別な名称を用いずに「誰とはなし」とするには、相応の理由が認められるのであって、狭衣物語の読みが反映しているのである。詠者名を記さないものは、26・39・89・216番歌である。これらは全て主人公である狭衣の詠歌であるから、それを理由に省略したのであるうか。これらの前の和歌も狭衣詠である。ただし、狭衣の詠歌が二首並ぶ場合に必ず省略するわけではなく、規則性は見出せない。

次の問題に移ろう。詠歌注記が付された原因である。様々な物語歌集を通観してみても、詠歌注記をもつものは多くはないが、青山本の詠歌注記は、何故、書かれたのか。詠歌注記が書かれている以上、それを書かなければならない必然性が存在しているように思われる。詠歌注記をいくつか分類して見ていくことにする。

第一、贈答および返歌の対象を明示する詠歌注記がある。

11 むらさきの身のしろころもそれならはおとめの袖にまさりこそせめ
中将返し

158 のとかにもたのまさらなむ庭たつみかけみゆへくとあらぬなめを
宮の姫君東宮への返し

11番歌には「返し」と返歌であること書かれ、10番歌「みのしろも我ぬき、せむかへしつとおもひなわひそあまの羽衣」と贈答を成していることを示している。嵯峨帝が詠む女二宮を喩えた「みのしろ」を、狭衣は源氏宮を喩えた「むらさきの身のしろころも」であったらと返すのであり、この二首は贈答歌として強く意識されなければ、歌意が十分に把握できない。贈答の妙を明確にしようという意図が読み取れる。同様の例は、4番歌「中将返し」、7番歌「せんゑうてん女御返し」、151番歌「女

へつたうかへし」、191番歌「斎宮返し」に見出せる。一方、158番歌は返歌であることだけでなく、その対象を明示していることが特徴である。この和歌は、贈答が物語中に見出せず、返歌の対象を示すことによって、前の157番歌と贈答を形成していると解されることを避けたものと思われる。5番歌「中将春宮女御せんゑうてんへ」、6番歌「中将一ほんの宮の少将みやうふのもとへ」も同様である。

第二、詠歌状況を明示するものである。

145 いかはかりおもひこかれしまなならてこのうきしまをたれかはなれん
女二の宮御心の中也

205 かへりこしかひこそなれからとまりいつらなかれしひとの行ゑは
大につくしよりのほりにからとまりにて

206 人しれぬいり江のさはにしろひともなくくきするつるの毛ころも
飛鳥井の君うたきぬにかきつけて

女二宮は一度、返歌を意図していなかったさび書きが図らずも狭衣に渡ってしまったことから、それ以降、和歌を口ずさむことも書き記すこともしない。145番歌も、狭衣には見られまいと心の中に留めて思うのである。205番歌はどうであろうか。狭衣の乳母子で大式になった道成は以前、飛鳥井女君を連れ出し求婚したのだが、女君はそれを拒絶し、ついに入水するのであった。和歌にも詠み込まれ、詠歌注記にも書かれる「からとまり」はまさに女君が入水した場所である。飛鳥井女君が亡くなった後、娘の姫君に渡された遺品の中で、産衣に書き付けられていた和歌が206番歌である。青山本には「うたきぬに（歌、衣に）」とあり「うたきぬに（産衣に）」の誤写である可能性もあるうが、いずれにせよ、衣に書き付けられていたことを強調して示していることに違いはない。姫

君が産衣を着るほど幼かった頃、父である狭衣にも伝えることができずに、ひとりで姫君を育てざるを得なかった女君の嘆きが描かれているのである。10 番歌「さかのゐん御しらねの時」、64b 番歌「けんしの宮かはりには、宮」、157 番歌「宮の中将は、姫君のたい」が同様の例として挙げられ、和歌に詠まれた思いをより強調する機能を担っているといえる。

第三、贈答および返歌の対象に加えて詠歌状況を明示するものが一例のみ見られる。

121 よそにやはおもひなすへきもろかつらおなしかさはさしもはなれす

源氏の宮にうへ、の返は、上の御哥也

青山本では後一条帝が詠む 117 番歌に「内のうへ」とあることから、後一条帝を「内のうへ」と称していることが知れる。つまり、121 番歌の詠歌注記は、源氏宮に後一条帝から贈られた和歌への返歌として養母の堀川上が詠んだ和歌である、と注しているのである。実際、121 番歌は、117 番歌「我身こそあふひはよそになりにつれ神のしるしに人はかさせ」と対応し、「よそになりけれ」と疎遠になったことを恨む後一条帝に「よそにやはおもひなすへき」といまだ深い縁で結ばれていると返す和歌となっている。だが、この和歌は源氏宮の詠歌ではない。源氏宮は後一条帝にも心を許さず、堀川上からの返歌の要請も拒否している。仕方なく堀川上が代詠するのであって、源氏宮の詠歌ではないことを明示することによって、源氏宮は和歌に詠まれたような心情では決してないことを示している。

最後に、夢告や神詠である和歌もそれ以外の和歌と明確に区別されている。30b 番歌「中将の夢に飛鳥井の君」、70 番歌「かもの明神大との、宮

に」、108 番歌「飛鳥井の君夢にみえて」、143 番歌「かもの御哥」を挙げることができる。

見てきたように、青山本は、依拠本文こそ確定しえないが、現在の狭衣物語の理解とは異なった、別の享受の様相を示しているように思われる箇所が見える。本稿では、その可能性の一端を、詠者名や詠歌注記に注目してあらあらと提示したに過ぎないが、それでも、青山本が狭衣物語研究にもたらしめるものを垣間見ることができたように思う。狭衣物語歌集はこれまでにほとんど取り上げられることはなかった。しかし、狭衣物語歌集は、狭衣物語の読みの可能性、あるいは読まれ方を指し示す要素を、多かれ少なかれ有しており、狭衣物語の享受史を考える上で重要な要素を孕んでいるといえるのである。

四 定家詠十四首・慈円詠一首

ここまで、青山本の狭衣物語歌についての様相を述べてきたが、最後に定家詠十四首・慈円詠一首について言及しておきたい。青山本に記された順に、個々の和歌ごとに概略を示せば次の通りである。⁸⁶

- 1 定家詠『拾遺愚草上』 473 番歌・文治五年（一一八九）「奉和無動寺法印早率露胆百首」恋、『続拾遺和歌集』 914 番歌
- 2 定家詠『拾遺愚草上』 851 番歌・建久四年（一一九三）「左大将家百首歌合」恋・初恋、『新古今和歌集』 1082 番歌（狭衣物語 139 番歌「おほ□にけつともきえむおもひかはけふりの下にくゆりわふとも」に似る。）
- 3 定家詠『拾遺愚草上』 860 番歌・建久四年（一一九三）「左大将家百首歌合」恋・別恋
- 4 定家詠『拾遺愚草上』 869 番歌・建久四年（一一九三）「左大将家百首

歌合」恋・夕恋

5 定家詠『拾遺愚草上』 977 番歌・正治二年（一二〇〇）「正治二年院初
度百首和歌」恋十首

6 定家詠『拾遺愚草上』 1076 番歌・建仁元年（一二〇二）「夏日侍太上皇
仙洞同詠百首応制和歌」恋十五首

7 定家詠『拾遺愚草上』 1077 番歌・建仁元年（一二〇二）「夏日侍太上皇
仙洞同詠百首応制和歌」恋十五首

8 定家詠『拾遺愚草上』 1079 番歌・建仁元年（一二〇二）「夏日侍太上皇
仙洞同詠百首応制和歌」恋十五首

9 定家詠『拾遺愚草上』 1084 番歌・建仁元年（一二〇二）「夏日侍太上皇
仙洞同詠百首応制和歌」恋十五首

10 定家詠『拾遺愚草上』 1948 番歌・建保六年（一二二八）「仁和寺宮五十
首」恋六首・寄煙恋、『続後撰和歌集』750 番歌

11 定家詠『拾遺愚草下』 2418 番歌・建仁二年（一二〇二）「水無瀬殿恋十五
首歌合」冬恋、『新古今和歌集』1137 番歌

12 定家詠『拾遺愚草下』 2419 番歌・建仁二年（一二〇二）「水無瀬殿恋十五
首歌合」暁恋

13 定家詠『拾遺愚草上』 975 番歌・正治二年（一二〇〇）「正治二年院初
度百首和歌」恋十首

14 慈円詠『拾玉集』1622 番歌・建久四年（一一九三）「歌合百首」春下・
逢恋、『新古今和歌集』1223 番歌

15 定家詠『拾遺愚草下』 2438 番歌・建暦二年（一二二二）から建保二年
（一二二四）「三宮十五首」恋歌

『詠注藤原定家全歌集（上）』『和歌文学大系58 拾玉集（上）』と和歌
本文を比較すると、7 番歌第二句「おもふことを」（比較対象とした活字本
は）

青山会文庫蔵「さころもの哥」についての考察

の本文を左に傍書する。）、10 番歌第一句「いか、せむ」、13 番歌第五句「を
とそさひしき」が異なっており、依拠本文の特定に繋がるようにも思わ
れるが、現時点では確定しえない。定家や慈円の詠歌を抜き書きした伝
本は多く、これらの一つから抜き出されたものであるかもしれない。

また、これらは、何の理由があって、こういった経緯で書かれたのか
も判然としない。しかし、詠歌時期も比較的近く、特定の百首和歌や歌
合から複数採歌するものが多い。さらに、これら全てが恋歌であること
に最も注目される。源氏物語の源氏と狭衣物語の狭衣の詠歌が『風葉和
歌集』のどの部立に所収されているかを調査した吉川美穂氏「狭衣物語
における和歌の一考察」では、源氏は三十九首中恋部六首に対して、狭
衣は三十四首中恋部十八首であることを指摘し、「狭衣大將は、明らかに
恋の男君として形象され」と述べる。そうであるならば、狭衣物
語自体が恋の物語として把握されていたと考えることも可能である。多
くの物語の中から恋の物語とも捉えることのできる狭衣物語の和歌を選
択し、定家・慈円詠の恋歌を恣意的に選り出す青山本の姿は、狭衣物語
や抜き出された定家・慈円詠の恋歌がもつ性質やその評価をも浮かび上
がらせるのではないか。同時に、青山本が書かれた理由や書写し享受さ
れたことの意味も見通せるように思われるのである。

注

- ① 『新日本古典文学大系38 六百番歌合』岩波書店、一九九八
- ② 『冷泉家時雨亭叢書60 明月記 五』（朝日新聞社、二〇〇三）に依り、
私に句読点を施す。
- ③ 『日本歌学全書8』博文館、一九五六
- ④ 『冷泉家時雨亭叢書57 明月記 二』（朝日新聞社、一九九六）に依り、
私に句読点を施す。
- ⑤ 『冷泉家時雨亭叢書40 中世歌学集・書目集』朝日新聞社、一九九五

- ⑥ 『物語史研究の方法と展望 論文篇』実践女子大学文芸資料研究所電子叢書Ⅰ、実践女子大学文芸資料研究所、一九九九
- ⑦ 『論叢狭衣物語4 本文の様相』新典社、二〇〇三
- ⑧ 拙稿「十本対照「さころもの哥」本文と校異―青山会文庫蔵「さころもの哥」の紹介―」(『平安文学研究・衣笠編』和泉書院、二〇〇九・三)
- ⑨ 青山叢書Ⅰ、青山会、一九九四(なお、現在、青山会文庫は、兵庫県篠山市教育委員会によって管理されている。)
- ⑩ 『尊鎮親王筆伊勢物語』(白帝社、一九六九)、『日本書蹟大鑑9』(講談社、一九七八)など。
- ⑪ 『青山会文庫所蔵和漢書分類目録』(注⑨)の作成にあたった中西健治先生のご教示による。
- ⑫ 以下、狭衣物語の歌番号は『物語和歌総覧 本文編』(風間書房、一九七四)に依る。
- ⑬ 立命館大学図書館西園寺文庫蔵本(函架番号・SB911.103Y31)を参照した。該本は三十六冊本である。
- ⑭ 『今治市河野信一記念文化館図書分類目録』(今治市河野信一記念文化館、一九七四・『国書目録叢書29』大空社、一九九八)に簡単な書誌が載せられている。後述する河野本一丁オモテ左貼紙の「寛永第八」を「宝永第八」と翻刻しているが、誤りであると思われる。
- ⑮ 井上宗雄氏『中世歌壇史の研究 室町後期』(明治書院、一九七二・一九八七、改訂新版)、新井栄蔵氏『校町上皇勅封古今伝授一箱―曼殊院本古今伝授関係資料七十三種をめぐって―』(『国語国文』四十五―七、一九七六・七)など。
- ⑯ 増補版、法蔵館、一九七八
- ⑰ 森繁夫氏『古筆鑑定と極印』(雅俗山荘、一九四三・臨川書店、一九八五)に掲載されるものに依る。
- ⑱ 『花押大集成』(全園社、一九九四)など。宮内庁書陵部蔵「愚問賢注」(函架番号・五〇三―一二三)には「スキウツシ(花押)親王」と尊鎮の花押が見られる。
- ⑲ 弘前大学附属図書館大塚甲山文庫蔵「さ衣の歌」(函架番号・Otsuka1102)。注⑧に校異として掲載。該本の詳細は別稿にゆずる。
- ⑳ 『校本狭衣物語』(全三巻・桜楓社、一九七六―一九八〇)『狭衣物語諸本集成』(全六巻・笠間書院、一九九三―一九九八)に加え、紙焼として内閣文庫本・鷹司本・陽明文庫本、影印として鎌倉市図書館本・伝為秀筆本・元和九年(一六二三)古活字本・承応三年(一六五四)版本、翻刻として九条家旧蔵本・蓮空本・宝玲本・神宮文庫本を対象とする。
- ㉑ 本文の引用は注⑧に依り、河野本・青谿書屋本に異同のある場合は右に傍書して示す。
- ㉒ 七十四首中四十九首(およそ六・五割)が一致する。飛鳥井雅章筆本は『狭衣物語諸本集成6』(笠間書院、一九九八)に依り、私に漢字・句読点を施す。
- ㉓ 六十六首中四十八首(およそ七・三割)が一致する。深川本は『深川本狭衣とその研究』(私家版「古典聚英」別冊、古典文庫、一九八二)に依り、私に漢字・句読点を施す。
- ㉔ 三十二首中十五首(およそ四・七割)が一致する。九条家旧蔵本は『九条家旧蔵本狭衣物語と研究(上)』(未刊国文資料刊行会、一九六〇)に依り、私に漢字・句読点を施す。該当の場面には衍字が見られるため、これは削除する。また、私に検討した範囲において巻二で青山本と和歌本文の異同がもっとも少ないのは、伝為相筆本で三十二首中十八首が一致し、64b 番歌を欠き64番歌を有する。
- ㉕ 定家詠歌は久保田淳氏『詠注藤原定家全歌集(上)』(河出書房新社、一九八五)を、慈円詠歌は石川一氏・山本一氏『和歌文学大系58 拾玉集(上)』(岩波書店、二〇〇八)を参照する。
- ㉖ 『女子大國文』六十七、一九七二・十
- (付記) 末筆ながら、貴重な典籍の閲覧・翻刻をご許可いただきました青山会文庫をはじめ、諸機関及び御所蔵者に心よりお礼申し上げます。
- (本学大学院博士前期課程)